

[総務委員会報告]

新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技： 2025年度進捗報告

一般社団法人日本家族看護学会総務委員会 COVID-19調査研究プロジェクト
(メンバーについては表1参照)

I. 背景

1. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行と医療現場への影響

新型コロナウイルス感染症の流行は医療現場へ著しい影響を及ぼし、看護職は様々な困難を経験している (朝倉, 高田, 杉山, 2020; Asaoka, 2020; Ide, Asami, Suda, et al., 2021; Lai, Ma, Wang, et al., 2020; Shigemura, Ursano, Morganstein, et al., 2020; Xiang, Yang, Li, 2020; 松本, 副島, 上別府, 2022; Umeda, Baba, Ishii, et al., 2023; Kitamura, Nakai, 2023). 日本家族看護学会では、2020年に家族支援専門看護師へ調査を行い、この流行下において家族支援の必要性が増大していること、しかし家族支援の困難が多々あることを明らかにしてきた (一般社団法人日本家族看護学会実践促進委員会実践促進班, 2020). さらに複数の先行研究から、この流行下における医療者の「自分の家族へ自分が感染症を持ち込むのではないかと心配」という悩みや「(施設管理者が) 職員の家族の様子を気にかけている」という工夫が明らかになっている (一般社団法人人とまちづくり研究所, 2020).

他学会等においても看護職 (会員) を対象とした新型コロナウイルス感染症流行の看護への影響は調査・報告されているが (一般社団法人日本小児看護学会広報委員会, 2020a; 一般社団法人日本小児看護学会広報委員会, 2020b), 前述のような『家族の一員としての医療者』の側面にはあまり着目されていない。看護職の家族看護実践には、看護職自身の

家族観等が影響すると考えられており (隼, 菊池, 山崎, 2019) 特に本学会において『家族の一員としての医療者』の側面に着目しながら、看護への影響を明らかにすることが重要と考えた。そこで本プロジェクトは、看護職が家族支援にどの程度困難をおぼえ、どのような家族支援の技を発揮しているかを明らかにすることを目的として開始した。

2021年度にはまずWebアンケート (1回目) を実施し、その結果概要は学会誌上で報告した (一般社団法人日本家族看護学会総務委員会COVID-19調査研究プロジェクト, 2023). 2022年度には新たに質的調査1と質的調査2を開始し、Webアンケート (2回目) 結果概要と合わせて学会誌上で報告した (一般社団法人日本家族看護学会総務委員会COVID-19調査研究プロジェクト, 2024). 2024年度の日本家族看護学会第31回学術集会では、Webアンケート (3回目) で収集した「実践者への応援メッセージ」を掲示した (一般社団法人日本家族看護学会総務委員会COVID-19調査研究プロジェクト, 2025). 質的調査1と質的調査2は2024年度中にデータ収集・解析を完了した。Webアンケートは最終5回目までを2025年度中に実施する計画である。本稿ではアンケート調査WG, 質的調査1WG, 質的調査2WGの2025年中の進捗状況を報告する。

II. 方法

1. 調査体制

プロジェクトメンバーの所属異動等を反映した、

表1. プロジェクトメンバー
【2025.12.1時点】

〈プロジェクトリーダー〉	荒木暁子（東邦大学）
〈アンケート調査WG〉	
テーマ	新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技：日本家族看護学会会員へのWebアンケート
WGメンバー	池田真理, 村本美由希, 森崎真由美, 大城怜（東京大学） キタ幸子（元東京大学） 菊池良太（滋賀医科大学） 副島亮史（神戸大学） 目麻里子（筑波大学） 荒木田美香子, 村田翔（川崎市立看護大学） 藤田千春（杏林大学） 深堀浩樹（慶應義塾大学） 上別府圭子, 村山志保, 丸山暁子, 陳俊霞（国際医療福祉大学） 佐藤伊織（東京科学大学）
〈質的調査1WG〉	
テーマ	コロナ禍における家族看護実践上の課題と方略—熟練の家族看護実践者への面接調査
WGメンバー	藤岡 寛（茨城県立医療大学） 上別府圭子（国際医療福祉大学大学院） 井上玲子（東海大学大学院） 中山美由紀（大阪公立大学大学院）
〈質的調査2WG〉	
テーマ	新型コロナウイルス感染症拡大下での家族の機能と経験—Photovoice methodによる探索
WGメンバー	法橋尚宏（神戸大学大学院） 西垣佳織（聖路加国際大学） 小林京子（聖路加国際大学） 松澤明美（北海道大学） 鈴木征吾（東京医科大学）

2025年12月現在の体制は表1の通りである。

2. 新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技：日本家族看護学会会員へのWebアンケート

1) アンケート調査の計画・方法

アンケート調査WGでは、2021年8-9月に実施した1回目Webアンケート、2023年1-2月に実施した2回目Webアンケート、2024年6-7月に実施した3回目Webアンケートに続き、2025年3-4月に4回目Webアンケートを行った。自身のメールアドレスを学会に登録している日本家族看護学会員へ研究事務局から一斉メールで研究の案内・WebアンケートのURLを送付した。Webアンケートの1ページ目で書面による研究説明を行い、2ページ目でチェックをつけてもらうことにより同意・不同意の意思表示を得た。3ページ目以降で、後述の調査項目について質問した。有効回答した希望者へ、5月に謝礼のAmazonギフトを、6月に結果速報をそれぞれ送付した。

調査項目は、それまでのWebアンケートの内容に準じつつ、分量を削減して以下について尋ねた。使用許可が必要な尺度を用いる場合には作成者の許諾を得て使用した。

2) 調査項目

- ①立場（臨床実践者か教育研究者か）、看護活動の場・対象 3項目
- ②家族看護の困難（日本家族看護学会実践促進委員会調査に基づくオリジナル項目）、所属施設の状況（面会制限の有無等）、家族の重要性の認識 4項目
- ③個人の背景属性（年齢、性別、管理職か、勤続年数、精神的健康（K6）、セルフコンパッション（SCS-12） 6項目
- ④職場・就労状況（労働生産性、離職意思、職場からのサポート、ICT導入・活用度、家族看護態度尺度（FINC-NA）、仕事の優先度の変化） 8項目
- ⑤ストレス状況（PTSD症状（PCL-5）、心的外傷後成長（PTGI-SF）） 2項目

⑥家族との関係（家族からのサポートに対する満足度（Family APGAR）、家族構成、家事関連困難感、家族と仕事のスピルオーバー（SWING-J））8項目

⑦自由記述3項目

（ア）新型コロナウイルス感染症の流行から、成長できたと思えたり、考えさせられたと思えたりしたこと

（イ）家族看護の教育（臨地実習や新人教育）の変化や工夫

（ウ）学会への要望

3) 実施の実際

1,381名（2025年2月28日時点でメールアドレス登録のある全会員）に一斉メール案内を行い、期日までに494名が同意した。同意した494名のうち31名は全ての設問に空白で回答しており、有効回答数（設問に一部であっても回答した人数）は463名であった。うち、最後の設問まで回答した者は440名であった（残りの23名は途中で回答を終えていた）。

最後の設問まで回答した者は、1回目調査では427名、2回目調査では517名、3回目調査では339名であり、1～4回目調査全てに回答した者は121名であった。

3. コロナ禍における家族看護実践上の課題と方略—熟練の家族看護実践者への面接調査

質的調査1WGでは、当プロジェクトが前に行った、新型コロナウイルス感染症拡大下における「家族看護の困難・技・今後」の結果を踏まえて、更に5類移行後も含めて、コロナ禍における家族看護実践上の課題とそれを乗り越えるための方略について、熟練の家族看護実践者への面接を通じて明らかにすることを目的とした。本学会のホームページおよびメールマガジンを通じて、研究概要の説明および面接協力を周知し、申し込みのあった対象者に対して、日時を調整し、個別面接を実施した。面接では、コロナ禍において、これまでの家族支援専門看護師としての家族看護実践について、できなくなったこと・工夫したこと・気がついたこと・新しく始

めたことを尋ねた。なお、語りの内容が（1）初回パンデミックが発生し、初めての緊急事態宣言が出されるまでの時期（2）感染拡大と収束が繰り返される時期（3）5類移行後から現在までの3つの時期のいずれに該当するか確認した。得られた面接データは逐語化し、現在、質的帰納的に分析中である。

4. 新型コロナウイルス感染症拡大下での家族の機能と経験—Photovoice methodによる探索

質的調査2WGは、新型コロナウイルス感染症拡大下での家族ユニット構成員および家族の困りごと、家族全体の変化や必要な調整、調整の結果として家族が得た力あるいは機能不全の有り様など、家族ユニットとしての経験を明らかにすることを目的に Photovoice method (Docherty, Sandelowski, 1999) を用いて調査を実施した。

III. 結果・進捗

1. 新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技：日本家族看護学会会員へのWebアンケート

1) 調査対象・結果の概要

対象者の属性は1～3回目調査結果とほぼ変わらず、学会員全体における男女比を鑑みると男性の回答割合が約1割とやや高いことも、これまでと同様であった（表2）。対象者の家族構成も、同居の配偶者・パートナーのいる方が6割、6歳未満の子どものいる方が約1割と、これまでとほぼ変わらない結果であった（表3）。臨床実践者136名の職場・活動対象の構成は1・2回目調査と変わらず、病院（病棟・部署横断的）・訪問看護サービスで活動する者が多かった（表4）。すなわち、人口学的背景および職業的背景についてこれまでの調査とほぼ変わらない対象者集団であった。

5類移行から約2年が経過しようとしていた今回の調査時点においても、実践者が過去1ヶ月間に経験した「家族の困難」が、その内容によっては変わらず在った（表5）。「患者と家族が会えない」「家

族の心身の負担が大きい」「家族に体調不良・精神的不調が出た」が比較的多く、約30～40%の臨床実践者が1ヶ月以内に経験していた。「家族がご遺体に会えない」「家族が地域で偏見・差別にさらされている」経験はほとんどなくなっていたが、ゼロでは無いことにも留意が必要である。

「家族看護の困難」については、いずれの項目についても、1～3回目の調査結果と比較して減少し

表2. 参加者の属性 N = 463

		n	(%)
年齢	20代	7	(2)
	30代	56	(13)
	40代	157	(36)
	50代	153	(35)
	60代以上	67	(15)
性別	女性	383	(88)
	男性	52	(12)
主な立場	教育研究者	275	(59)
	臨床実践者	154	(33)
	学生	14	(3)
	その他*	20	(4)
管理職	はい	135	(31)
	いいえ	298	(69)
現在の職場の勤続年数	1年目	38	(9)
	2～5年目	146	(34)
	6～10年目	104	(24)
	11～20年目	93	(22)
	20年以上	49	(11)

注釈：無回答者（欠損）を除外。

*看護管理者、教育担当、行政官、無職など

ていた（表5）。それでも「家族からの情報収集ができない」「家族への説明・指導・教育ができない」「家族の様子（関係性など）を観察できない」は2割以上の者から報告されていた。

2) その他の成果

自由記述で尋ねた「家族看護の教育（臨地実習や新人教育）の変化や工夫」について、臨地実習では、「学生が家族と会える機会が減った」「患者と家族の関係性を読み取る機会が減った」などの変化から、その機会を生み出すために、「実習施設と学校が双方向に働きかける」「教員や実習指導者が率先してやって見せる」、その機会を最大限生かして「実習中にできるかぎり家族看護を学べるよう指導する」「重要性を伝えられるように講義する」そして「他の教員と一緒に取り組む」という工夫がされていた。一方、新人教育では、「実習での経験値が低いスタッフが増えた」「家族との関わりにおける経験が不足している」などの変化から、先輩が「一緒に実践してみる」、家族とのコミュニケーション方法を「具体的に指導する」、折に触れて家族看護の「大切さを伝える」、そしてシミュレーション教育や院内研修など、「教育手法を工夫する」という工夫がされていることが分かった。

表3. 参加者の生活状況

N = 463

			n	(%)
家族構成	配偶者・パートナー	いない	119	(27)
		いる（非同居）	47	(11)
	配偶者・パートナー以外の成人（65歳未満）	いる（同居）	269	(62)
		いない	248	(57)
	配偶者・パートナー以外の成人（65歳以上）	いる（非同居）	97	(22)
		いる（同居）	92	(21)
	6歳未満の子ども	いない	270	(62)
		いる（非同居）	105	(24)
	6歳以上の子ども	いる（同居）	62	(14)
		いない	377	(86)
育児状況	現在育児を担っている	いる（非同居）	8	(2)
		いる（同居）	51	(12)
介護状況	現在介護を担っている	いない	238	(55)
		いる（非同居）	36	(8)
育児状況	現在育児を担っている	いる（同居）	162	(37)
		はい	160	(37)
介護状況	現在介護を担っている	いいえ	275	(63)
		はい	80	(18)
		いいえ	354	(82)

注釈：無回答者（欠損）を除外。

表4. 臨床実践者の属性

N = 154

臨床実践の活動場所（複数回答可）	n	(%)
病院	77	(50)
病棟	8	(5)
外来	23	(15)
部署横断的	4	(3)
診療所	0	(0)
助産所	3	(2)
高齢者施設（介護保険施設や有料老人ホーム等）	27	(18)
訪問看護サービス（介護保険・医療保険）	0	(0)
居宅介護サービス（訪問看護以外）	1	(1)
保健所・保健センター	1	(1)
地域包括支援センター	0	(0)
相談支援事業所	1	(1)
障害者入所施設（短期入所、宿泊型自立訓練等）	3	(2)
障害者通所施設（生活介護、放課後デイ、児童デイ等）	0	(0)
保育所	1	(1)
児童入所施設（母子生活支援施設、乳児院、児童養護施設等）	7	(5)
自由記述*		
臨床・活動対象（複数回答可）		
妊娠・出産を経験する家族	24	(16)
子どものいる家族	75	(49)
介護を要する高齢者とその家族	87	(56)
精神疾患のある方とその家族	55	(36)
がんのある方とその家族	83	(54)
がんのある方とその家族以外の身体疾患のある方とその家族	82	(53)
手術、外科的・急性期の治療を受ける方とその家族	64	(42)
内科的・慢性期の治療を受ける方とその家族	82	(53)
終末期にいる方とその家族	97	(63)
いわゆる健常な方とその家族	14	(9)
家庭内に暴力（児童虐待・高齢者虐待・ドメスティックバイオレンス（DV））がある家族	31	(20)
障害のための特別なニーズ（療育／リハビリテーション等）を持つ方とその家族	41	(27)
新型コロナウイルス感染症に罹患した方（重症者）とその家族	26	(17)
新型コロナウイルス感染症に罹患した方（軽症者・無症状者）とその家族	45	(29)
その他**	8	(5)

注釈：無回答者（欠損）を除外。

* 産業保健師、特別支援学校など

** 入退院支援など

表5. 臨床実践者の、この1ヶ月間の経験

N = 154

患者とその家族に（新型コロナウイルス感染症患者が否かに関わらず）見られた困難		
家族と患者が会えない	52	(34)
家族と患者が連絡を取り合えない	28	(18)
家族と医療者が会えない	31	(20)
家族の心身の負担が大きい	63	(41)
家族が医療者や施設への不信感を持っている	36	(23)
家族がご遺体に会えない	1	(1)
家族内の役割分担が変化した	37	(24)
患者以外の家族も新型コロナウイルス感染症患者となった	44	(29)
家族に体調不良・精神的不調が出た	47	(31)
家族の経済状況が悪化した	19	(12)
虐待・暴力が発生・悪化した	6	(4)
家族関係が悪くなった	14	(9)
家族が地域で偏見・差別にさらされている	1	(1)
家族看護の困難		
家族からの情報収集ができない	37	(24)
家族への説明・指導・教育ができない	34	(22)
家族の様子（関係性など）を観察できない	42	(27)
カンファレンスの開催ができない	14	(9)
ご遺体の搬送にあたり、尊厳に欠ける仕方・対応しかできない	1	(1)
家族関係の調整や、ねぎらい・ケア的な声掛けができない	23	(15)
他部署や機関が受け入れ制限や臨時休業していて、家族を紹介できない	6	(4)

詳細を補遺 (Appendix) に記した。

2. コロナ禍における家族看護実践上の課題と方略 —熟練の家族看護実践者への面接調査

2023年3月～2024年9月にかけて、9名の家族支援専門看護師に面接を行った。現在、面接内容の逐語化を行い、分析中である。

3. 新型コロナウイルス感染症拡大下での家族の機能と経験—Photovoice methodによる探索

小学生から高校生までの18歳未満の子どもを同居して養育している4家族にインタビューを実施した。結果として、COVID-19で生じた生活の制限、教育や医療サービス利用の困難、経済的困窮などへの家族としての調整や対処が明らかになった。全家族が共通して、変化や喪失を伴うコロナ禍特有の体験を経て、家族役割や関係性を見直し、新たな機能や価値観を見出していた。コロナ禍では子どもの声が社会に届きにくく、子どもがどの発達段階でコロナ禍を経験したかという視点を含めてアセスメントし、体験の意味づけのプロセスを支えることが求められていた。

IV. 今後の予定

質的調査1WGは、昨年度に終えた面接調査に対して、質的分析を行い、2026年度中に学会発表および論文投稿を行う予定である。質的調査2WGは2024年度中にデータ収集を終え、分析結果を日本家族看護学会第32回学術集会にて演題発表した。ここで明らかにした新型コロナウイルス感染症流行下での家族看護職者の経験および家族の経験が、今後の家族看護学の発展に役立ち、また、新たな感染症流行等の災害発生時に参考となることが望まれる。

アンケート調査WGでは、最終5回目となるWeb調査を2025年12月～2026年1月に実施し、それを含めた全体のまとめを2026年度中に完了させる予定である。プロジェクトは2026年度いっぱい終了するものの、会員の皆様から得られたデータセッ

トについては、学会の(会員の皆で共有する)所有物として広く利活用することができるシステムを整えていく。

本研究に関連して開示すべき利益相反は無い。

文 献

- 朝倉京子, 高田 望, 杉山祥子: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) アウトブレイクが看護職に与える心理的影響 宮城県内の病院に勤務する看護職を対象とした実態調査, 看護管理, 30(8): 756-62, 2020
- Asaoka H: Post-traumatic stress symptoms among medical rescue workers exposed to COVID-19 in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*, 74(9): 503-505, 2020
- Docherty S., Sandelowski M.: Interviewing children, *Res Nurs Health*, 22(2): 117-185. doi: 10.1002/(sici)1098-240x(199904)22:2<117::aid-nur9>3.0.co;2-h. 1999
- 隼 智子, 菊池良太, 山崎あけみ: 家族看護実践に影響を与える要因に関する文献検討, 大阪大学看護学雑誌, 25(1): 89-95, 2019
- Ide K., Asami T., Suda A., et al: The psychological effects of COVID-19 on hospital workers at the beginning of the outbreak with a large disease cluster on the Diamond Princess cruise ship, *PLoS ONE*, 16(1): e0245294, 2021 <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0245294>
- 一般社団法人日本家族看護学会実践促進委員会実践促進班: 新型コロナウイルス感染症に対する家族ケアの必要性に関する家族支援専門看護師の認識, 日本家族看護学会2020年度第3回理事会資料, 2020
- 一般社団法人日本家族看護学会総務委員会 COVID-19調査研究プロジェクト: 新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技—日本家族看護学会会員へのWebアンケート 1回目アンケート (2021年8～9月実施) 結果概要報告一, 家族看護学研究, 28: 123-132, 2023
- 一般社団法人日本家族看護学会総務委員会 COVID-19調査研究プロジェクト: 新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技—日本家族看護学会会員を対象とする調査の結果概要・進捗報告一, 家族看護学研究, 29: 108-114, 2024
- 一般社団法人日本家族看護学会総務委員会 COVID-19調査研究プロジェクト: 新型コロナウイルス感染症流行下の看護職における家族看護の困難と技一, 2024年度進捗報告一, 家族看護学研究, 30: 134-141, 2025
- 一般社団法人日本小児看護学会広報委員会: 小児看護におけるCOVID-19に関するアンケート調査 (第1報), <https://jschn.or.jp/files/2020/12/COVID19アンケート第1弾.pdf>, 2020a
- 一般社団法人日本小児看護学会広報委員会: 小児看護におけるCOVID-19に関するアンケート調査 (第2報), <https://jschn.or.jp/files/2020/12/COVID19アンケート第2弾.pdf>

- 2020b
 一般社団法人とまちづくり研究所：新型コロナウイルス感染症が介護保険サービス事業所・職員・利用者等に及ぼす影響と現場での取組みに関する緊急調査【事業所管理者調査】. <https://hitomachi-lab.com/official/wp-content/uploads/2020/06/f9780dfabd9260cfd1d48cb50c374e2.pdf>, 2020
- Kitamura Y., Nakai H.: Factors Associated with turnover intentions of nurses working in Japanese hospitals admitting COVID-19 patients. *Nurs Rep*, 13: 792-802, 2023
- Lai J., Ma S., Wang Y., et al.: Factors associated with mental health outcomes among health care workers exposed to coronavirus disease 2019, *JAMA Netw Open*, 3: e203976, 2020
- 松本 淳, 副島亮史, 上別府圭子：新型コロナウイルス感染症の流行やそれに伴う面会制限によって看護師が家族に関わる際に抱く困難とその対応, *家族看護学研究*, 28: 15-29, 2022
- Shigemura J., Ursano R. J., Morganstein J. C., et al.: Public responses to the novel 2019 coronavirus (2019-nCoV) in Japan: Mental health consequences and target populations, *Psychiatry Clin Neurosci*, 74: 281-282, 2020
- Umeda A., Baba H., Ishii H., et al.: Experiences of nurses in charge of COVID-19 critical care patients during the initial stages of the pandemic in Japan, *Global Health & Medicine*, 5: 169-177, 2023
- Xiang Y. T., Yang Y., Li W.: Timely mental health care for the 2019 novel coronavirus outbreak is urgently needed, *Lancet Psychiatry*, 7: 228-229, 2020